

《解題》

『農耕の世界、その技術と文化』

農耕文化研究振興会

さきに『農耕の技術（と文化）』誌の創刊15周年を記念して企画された本叢書（全8巻）は着々と刊行が進んでいて、既刊の第Ⅰ～Ⅱ巻に続いて、近々に第Ⅲ巻、年末には第Ⅳ巻が予定されている。

たくさんの優れた論文が『農耕の技術（と文化）』誌に今までに掲載されていたことを、あらためて「発見」される方も多いようで、そのような批評や読後感をたびたび耳にする。

それぞれの巻には下の諸論文の他に「解題」の文章がつけられている。収録された諸論文について、その分野の全体的視野からみた位置づけ、学問的意味を解説すると共に、その学的領域の将来展望などにも触れていて、独立した論攷として読むことも可能であろうかと思う。もちろん、各巻の諸論文を熟読していただくことが希望であるが、それらの論文の紹介を兼ねる3つの解題の文章をここに掲載して、ご参考に供したい。

第Ⅰ巻 農耕空間の多様と選択

佐々木高明：農耕文化の異なる論理

宮崎 昭：牧羊体系の自然的・社会的背景

廣瀬 昌平：畑作農業の変貌と農民の技術選択

長嶋 俊介：離島・島嶼における生活と農耕

山中 速人：民族意識の高揚と伝統農法

應地 利明：南インドにおけるシコクビエの栽培技術

福井 捷朗：火耕水耨の論議によせて

第Ⅱ巻 アフリカと熱帯圏の農耕文化

伊谷純一郎：ケニア遊牧民の潜在的農耕

末原 達郎：バシ人の焼畑農業

伊谷 樹一：タンザニア・トングウェの農耕

若月 利之：内陸小低地における西アフリカ型稲作

高谷 好一：掛け流し傾斜水田の事例

山本 紀夫：中央アンデスにおけるジャガイモ栽培と休閒

第Ⅲ巻 稲作空間の生態

高谷 好一：水田の景観学的分類試案

安藤 和雄：バングラデシュのアウス稲・アマン稲の混播栽培

宮川 修一：東北タイ天水田の生産量変異

五十嵐忠孝：西ジャワ・プリアガン高地における水稻耕作

古川 久雄：ルソン島の陸稲栽培とその環境

高谷 好一・立本 成文・古川 久雄：スマトラの小区画水田

フィールド・ワークから生まれた稲作論

—第Ⅲ巻解題—

田 中 耕 司*

1. 稲作空間の多様性をめぐって

本巻には、『農耕の技術』誌に掲載された諸論文から、アジア各地の稲作農耕を扱った論考6篇を収録した。これらをまとめてこの巻の標題を「稲作空間の生態」としたが、はじめに、この標題に掲げた「稲作空間」や「生態」ということばについて若干の説明を加えておこう。

「稲作空間」は、字義どおりには、稲を作っている場所あるいは稲作がひろがるある領域をあわらしている。この意味からすると、1筆の水田区画も稲作空間であり、ある規模でまとまって稲作が展開する水田地帯も稲作空間ということになるが、この巻では、1筆の水田区画や水田地帯ということばで想定されるような範囲よりも、もう少し大きな稲作の広がりをさしてこのことばを使っている。たとえば、ある地域が他の地域とは明らかに異なった稲作を行う場合に、その種の稲作を共有する地理的範囲をさしてひとつの稲作空間とするという考え方である。この場合、ある特定の稲作空間で行われる稲作にある種の共通性が見られるのは当然である。稲作を構成する技術や作業だけでなく、稲作を支える自然的基盤、あるいは稲作に対する人々の行動や態度などにも、その空間に共通する性格が認められることになろう。こうした自然的にも、あるいは技術的にも、そしてさらには社会的・文化的にも共通性をもつような領域を稲作空間ということばで表してみた。言い換えれば、ある種の型（タイプ）として類別できるような稲作が展開する地域、それを稲作空間としてとらえてみようということである。

*たなか こうじ、京都大学東南アジア研究センター

「生態」ということばの用法についても若干の説明が必要であろう。もともと生物学のなかで生物個体や生物集団の生存の様式をさしていたこのことばが、比喩的に人間社会の仕組みや人の行動様式までをさして使われるようになった。このように、いまでは生態ということばはきわめて意味範囲の広い、曖昧なことばとして使われているが、本巻でも、いささか曖昧な概念のままではあるが、後者の比喩的な使い方にならって生態ということばを使うことにした。したがって、稲作空間の「生態」というときには、ある特定の稲作空間が成立するような自然的基盤や文化的背景、そしてそこに成立した特定の稲作タイプが存続するための条件と仕組み、さらにその稲作を基礎に培われた人々の稲作に対する関わり方など、稲作のありようのすべてがこのことばのなかに込められているわけである。

本巻のテーマについての説明はこれくらいにして、次に、「稲作空間の生態」というテーマに迫るのにどんな方法があるのかを考えてみよう。まず、すぐに頭をもたげてくるのは、上に述べた「ある種のタイプとして類別できるような稲作」をどのように区分するのかという問題である。アジア、なかでも稲をもっとも主要な農作物としているアジア稲作圏に限っただけでも、いろいろなタイプの稲作があることは容易に想像できる。日本の稲作、中国の稲作、あるいは東南アジア諸国やインドの稲作等々、それぞれが違った特徴をもつことは、たとえ各国の稲作を実際に見ていなくても十分に想像できることであろう。とすると、ある特定の稲作のタイプを取り出すだけではなく、それと同様な性格をもつ稲作をも含めて、それらをさらに大きくくくっていく方法を考えることがより重要な課題ということになってきそうである。際限なく分類するのではなく、多様なアジアの稲作を、まずは大きなグループに類別していくのが、アジアの稲作の多様性を理解する第一歩となろう。

そんな試みとして提出されたのが、高谷さんの「水田の景観学的分類試案」である。この高谷論文は『農耕の技術』創刊号（1978年）の巻頭を飾った論文で、発表後に引用されることも多く、稲作文化論の分野だけでなく、稲の栽培に関わる農学分野の人たちにも大きな影響を与えた。発表当時、農業技術に関

わる研究者から、アジアの稲作をとらえるのにこんな見方があるのをはじめて知った、たいへん新鮮な刺激を受けた、という声をよく耳にしたものである。アジアの水田景観はきわめて多様であるが、論文冒頭で高谷さん自身が述べているように「結局はせいぜい4つか5つの類型に分類されてしまう」というのが、高谷さんの論文の骨子である。従来、農学の分野でアジアの稲作を論じるときには、国別に稲作の特徴を述べたあと、稲の栽培様式に従ってそれをさらに細分するというのが普通の方法であった。たとえば、各国の稲作概要につづけて、地域別に、あるいは作季別に、または直播や移植などの栽培技術別に稲作の様子が紹介された¹⁾。しかし、これらさまざまな稲作を広く横断的に比較したり、さらにはそれらを統一的に把握するような枠組みは、残念ながら農学の分野からは用意されていなかったのが当時の状況であった。その意味でもこの論文が与えた影響はたいへん衝撃的であったと言ってよい。

高谷論文では、景観論的な立場から、アジアの稲作を大きく4つの稲作類型に区分している。ここで景観ということばが登場するが、これはアジアの稲作を見るときに、「地形とか水文といった要素に分解して分析的に見るのではなく、もう少し、総合的、鳥瞰的にとらえよう」とする立場を表すために用いられたことばである。いまでは、このことばが、「景観を守る」というような用法で、自然保護や環境保全の立場からよく使われるようになったが、アジアの稲作や水田を景観としてとらえる見方は、やはりこの高谷論文が最初の試みではなかったかと思う。「試案」というある意味では控えめなタイトルを掲げてはいるものの、水田農業や稲作農耕を景観として論じた最初の論文としてたいへん大きな意義をもっていたといえよう。東南アジア地域のフィールド・ワーカーとして、各地をくまなく歩いた高谷さんにしてはじめてまとめることができた記念碑的な論文と言っても過言ではない。

ところで、この高谷論文では、前述のように4つの稲作類型が提示された。すなわち、①扇状地の稲作、②デルタの稲作、③平原の稲作、そして④湿地林の稲作である。これらは、稲作を成り立たせている気候条件や地形・水文条件、あるいは自然植生、そしてこれら自然条件に関わる人間の営為の結果としての

稲作の存在様式などを総合化して区分したうえで、それらの特徴を扇状地、デルタ、平原、湿地林などのことばによって象徴的に表したものである。この命名から明らかなように、いろいろな稲作があるけれども、結局は与えられた自然条件が同じようなところには同じような性格をもった稲作が成立している、という直感が高谷さんの頭のなかで働いていたようである。各地の稲作を見るなかで、フィールド・ワーカーとしての高谷さん独特の直感が、地形や植生というビジュアルな特徴によって総合化された稲作分類へと導いていったのであろう。

この論文が発表されてからも、高谷さんはアジアの稲作分類についての論考をいくつか発表している²⁾。上記の4つの分類にさらにひとつ、東南アジア島嶼部のジャワを中心とする地域の稲作が火山島の稲作として加えられ、①山間盆地の稲作（扇状地の稲作と同じもの）、②デルタの稲作、③平原の稲作、④湿地林の稲作、⑤火山島の稲作という5つの類型に区分したこともある。あるいは、稲作分布の重要度の高い地域をアジア稲作圏の「中心域」、その周辺部を「周辺域」としたうえで、中心域には、灌漑移植型稲作、散播中耕型稲作、浮稲型稲作、焼畑型稲作の4類型が、そして周辺域には、大陸部の華北型、デカン型、カシミール型と、東南アジア島嶼部の短期休閒型、ジャワ型、プランテーション卓越型の計6つの類型が分布する、という考え方も出している。そして、稲作の歴史的な展開過程を考慮しながら、さらに簡潔に、アジアには乾燥大陸の畑作型稲作、照葉樹林の谷間の移植稲作、熱帯山地の焼畑稲作の3つの稲作体系があるという類型区分も行っている。

高谷論文の末尾に、「類型化した稲作をその系譜について云々することは、今の私には、あまりに荷の勝ちすぎた仕事である。しかし、この種のテーマは、稲作をその現断面のみで研究する私のごとき地理学者にとっても避けては通りすぎすことのできない問題」と記されているように、この論文を発表したあとの高谷さんは、アジア稲作の類型論だけでなく、各類型の系譜をたどる、どちらかといえば稲作系譜論に近い仕事を進めていくことになる。上に紹介した後年の高谷さんの類型区分は、こうした稲作の系譜関係を念頭においてなされた

ものである。

関連する高谷さんのその後の研究動向に若干ふれたが、私は、アジアの稲作の多様性を理解するのに、高谷論文で示された景観学的な手法がいまも非常に有効かつ意義のある方法だと考えるひとりである。とりわけ、この論文で示された4類型にさらに火山島の稲作を加えた5つの類型は、アジアの稲作を総合的に区分するのにたいへん有効だと考えている。そしてさらに、こうした景観学的な類型論に加えて、現在のアジア稲作の多様性を理解するのに、その系譜をたどることも重要な課題であることは言うまでもない。とくに稲作技術の成立や伝播を考えるとそれは避けて通れない作業であろう。私自身は、こうした景観学的な類型論と技術の系譜論を組み合わせた手法が稲作の風土論ではないかと考えている。そして、こうした方向での稲作論をいくつかまとめたことがあるが³⁾、これらの仕事はいずれも、もとはと言えば高谷さんのこの論文に大きく触発されたからにほかならない。高谷論文は、すでに発表以来15年以上を経たとはいえ今も大きな影響力を秘めた論文である。読者には、十分に味読されるよう期待したいものである。

2. フィールド・ワークから生まれた稲作論

さて、高谷論文の解説に少し紙数をさきすぎたようである。以下には、本巻に収録したその他の論文に関わる問題を取りあげることにする。「稲作空間の生態」という本巻のテーマに即して言えば、その「生態」により比重をおいた論文が高谷論文につづく各論文である。

高谷論文の景観学的類型区分に従えば、デルタの稲作の事例が安藤論文「バングラデシュのアウス稲・アマン稲の混播栽培」(1984年)、平原の稲作の事例が宮川論文「東北タイ天水田の生産量変異」(1991年)、火山島の稲作の事例が五十嵐論文「西ジャワ・プリアガン高地における水稻耕作」(1984年)と古川論文「ルソン島の陸稲栽培とその環境」(1982年)、そして湿地林の稲作の事例が高谷他論文「スマトラの小区画水田」(1981年)となる。どの論文も各稲作類型のなかの稲作技術やその背景となる自然立地条件を詳細に論じている

が、そのいずれにも共通する特徴は、長期間の定着調査、あるいは広域の観察調査など野外調査のなかでえられた知見をもとにしている点である。

既存の栽培技術の改良や新たな技術の創造を目標とする農学研究においては、実験圃場やポットを使った栽培試験と実験室での化学分析などが主な研究手法となっているが、もともと農学を専門としていた安藤さんや宮川さんは、こうした実験的手法ではなく、村に長期間にわたって定着する実態調査によって稲作の全体像を描き出そうとした。安藤さんの場合は単独で、宮川さんの場合は農学者だけでなく、社会学者や人類学者との学際的共同研究のメンバーとしてひとつの村をくまなく観察し、多くの農民に聞き取り調査を実施するというやり方である。しかも、とくに強調したいのは、どちらの場合も、1筆の水田の稲の生育や収量を詳細に観察・測定するという方法を採用したことである。すなわち、農学研究の圃場試験の手法を援用しながら、村落内の微細な立地条件や農民の耕作技術、作業の実施状況などに対応させて稲の生育や収量を総合的に解釈しようとした点が共通している。

宮川さんの場合は村落内の数千筆に及ぶ全筆が、安藤さんの場合は107筆のサンプル水田が調査対象で、その調査結果の一部が両報告のもとになっている。その結果については本文にあたっていただくことにして、ここでは、両論文がもつ意義について簡単にふれておくことにしよう。そのひとつは、一村落内の稲作にこだわりつづけた調査によって生まれてきた成果である。村内のひとつひとつの水田を細かく観察することによって、一村落の水田といえどもそれが一様には語れないことを明らかにし、微細な地形条件や水文条件が稲の生育や収量に強く関係するだけでなく、農作業の進め方にまで影響していることを詳しく示したことである。微地形に対応した品種や作季の選択、栽培技術の応用というところまでなら、聞き取り調査で十分にできるけれども、それ以上に、農学研究の手法を援用することによって稲作の実態がここまで実地に即して詳細に明らかにできたという点が、両報告のもつ第一の意義ではないかと思う。

両報告のもうひとつの意義は、たったひとつの村を対象にした調査ではあったけれども、その村を含むより大きな稲作空間の生態を余すところなく描写し

て、ひとつの稲作論とも言える論点を提示したことである。宮川さんの調査村は降雨が不安定で水不足に陥りがちな天水田地帯、一方、安藤さんの調査村は毎年かならず洪水に見舞われるデルタの深水稲作地帯というように、稲作環境としては実に対照的な地域での調査であったにもかかわらず、この詳細な調査から導き出されたのは、期せずして同様な内容のものであった。それは、どちらの村でも、環境への適応的な技術が応用されており、しかも、その応用によって、「低位不安定」あるいは「低位安定」という稲作であっても、与えられた条件下で最大限の多収穫を得ようとする工夫がこらされた稲作が展開していることを明らかにした点である。在来の稲作技術がもつ環境適応力を明らかにしたという意味において、両報告は短い論文ではあるけれども優れた稲作論となっているのである。

宮川さん安藤さんともに、この論文を発表してからもそれぞれ東北タイとバングラデシュでさらに関連した調査を継続している。宮川さんの場合は、関心をさらに東北タイ全域に広げ、天水田稲作の環境と技術についていくつかの報告を発表している。また、安藤さんもバングラデシュの農村開発のための共同研究を組織して、ベンガル・デルタの詳細な稲作技術調査を行いながら、さらにその関心を農村開発研究へと広げつつある⁴⁾。稲作のフィールド・ワーカーにとどまらず、地域のフィールド・ワーカーへと変身しつつある点でも、両者は共通しているように思える。

「西ジャワ・プリアガン高地における水稲耕作」をまとめた五十嵐さんはもともと生態人類学を専門とし、とりわけ、人の発育や成長について詳細な人類学的調査を行ってきた研究者である。その五十嵐さんが、インドネシアの西ジャワ州の一村の稲作について、農学者が顔負けするほどの詳細な調査を行い、その記録を発表した。村に住みついた五十嵐さんのインタビュー風景が彷彿とするようなその内容は、文字どおり微に入り細にわたっており、インタビューされた農民たちは五十嵐さんの執ような質問にずいぶん悩まされたのではないかと思えるほどである。

調査の対象となったプリアガン高地は、ジャワ島の西部、スンダ人が居住す

る地域である。五十嵐さんの調査はこのスンダ人の生活総体を知ることにあつたので、稲作そのものが調査の主要な対象ではなかったはずである。にもかかわらず、稲作の背景となる気候や季節、稲の生育と稲作作業、そしてこの地域の在来稲作がもつ特徴などについて実に丹念な調査が行われたことがこの報告からうかがえる。五十嵐さんはこの村に定着しながら、実は、村人が自然をどうとらえているのか、あるいは彼らの生業が自然との関わりはなかでどんな仕組みで動いているのかを知ろうとして、調査をつづけていた。したがって、調査の対象はあくまでその村に住む人たちで、彼らが稲をどう認識し、彼らがどんな考えのもとに稲作に取り組んでいるのか、それを知ることが主要なねらいであった。その結果が、稲作作業の実に入念な記録となって残された。読者には煩雑との印象を与えるかもしれないほどの、スンダ語での稲の生育段階や農作業を表すことばは、村人の自然認識の体系を知ろうとする根気のいる作業のなかで採集されたものである。農学者が1筆1筆の水田を根気よく調べたように、生態人類学者は1人ひとりの村人がもつ知識の体系をとときには稲作を手がかりにしながら調べていく。結局のところ、こうした丹念なフィールド・ワークによって残された記録が、各地の稲作の実態を知るうえで一級の資料となるのではないかと思う。

五十嵐さんがスンダ地方の一村落で調査していたころは、在来の稲作と新しく導入されようとしていた改良稲作が並存する時代であった。生育期間の短い新品種を主体にした改良稲作が導入された顛末がこの論文のなかにも記載されているが、その後は、この新しい稲作が各地に急速に広がっていくことになる。本巻に収録するにあたって、五十嵐さんが文末に追記を新たに付しているように、この村でも現在では改良稲作が主要な稲作となっているようである。そんな意味でも、五十嵐論文は在来の稲作技術の実相を伝える貴重な記録といえよう。先に、この地域の稲作が高谷さんの類型区分によれば火山島の稲作に属すると述べたが、この五十嵐論文に見られるような入念な栽培技術の体系が火山島の稲作の特徴である。本田の耕耘・均平作業だけでなく、畦塗りや畦の法面の除草作業、そして稲植え付け後の本田の除草作業などが入念に行われている。

また、穂まきや数品種の混合播種などもこの稲作類型に特徴的な技術である。高谷さん風に言えば、アジア稲作の「周辺域」で稲作技術がさらなるインボリューションを遂げたのが火山島の稲作ということになるが、まさしくそのインボリューションの好例が、五十嵐論文に余すところなく記録されているということになろう。

この論文で稲の作季と季節の推移との関係や作季と暦との関係について論じているように、五十嵐さんは当時から村人の季節の認知の仕方や生活のなかの暦の役割などに強い関心をもっていた。この報告を発表してからは、研究関心を暦や季節などの時間サイクルと人間の生活との関係に向けてさらに発展させており、論文末尾に追加文献として加えられた「農作業、季節、星一西ジャワプリアガン高地における畑地耕作をめぐる季節性と農作業のタイミング」に、こうした関心がよく現れている。スダダ人の一村落の農業の全体像を理解する助けにもなるので、興味のある読者はこの畑作に関する論文もあわせて参考にされるのがよい。

以上の定着調査にもとづく稲作論とは趣きを異にするのが、古川論文と高谷らの論文である。古川論文「ルソン島の陸稲栽培とその環境」は、その副題に「事例調査」とあるように、ルソン島の2つの地域、バタンガス地方とカガヤン地方のとくに陸稲栽培に注目した調査の結果をまとめたものである。古川さんはもともと土壌生成論や地形発達論を専門としており、この論文にも見られるように地形や土壌条件と稲作との関係を調査するためにフィリピン全域を広く踏査していたが、その広域調査の一部が事例研究としてまとめられた。したがって、1つの村や地域を長期にわたって丹念に調査するスタイルではなく、広い地域を対象にした広域概査をもとに、各地の事例を比較するという手法がとられることになる。そして、その比較の対象として取りあげられたのが陸稲栽培である。

ところで、その比較にあたって古川さんが常に念頭においていたのは、稲作は時代とともに変化するという視点ではなかったかと思う。調査のなかでいま見ている稲作の姿が過去にもそうであったのか、あるいは過去の稲作が変容し

たものなのか、さらにはそもそも過去に稲作があったのかなど、時間の推移とともに変遷するそんな稲作の流れを念頭におきながら広域調査がなされたことが、この報告からうかがえるのである。地理的な空間を縦横に駆け巡り、歴史的な空間を求めて飛翔するという調査スタイルがこの報告を発表して以後の古川さんのフィールド・ワークの特徴であるが、そんな特徴が最初にうかがえるのがこの「ルソン島の陸稲栽培」ではないかと思う。

さて、その古川論文であるが、事例として取りあげられた2つの地域のうち、バタンガス地方では火山のすそ野に発達した畜力畝立て—散播—畜力中耕という技術体系をもった陸稲栽培が、そしてカガヤン河谷では、焼畑での陸稲栽培から点播や散播中耕による陸稲栽培までのさまざまな栽培法が、それぞれの立地環境と対応させつつ紹介されている。そして、これらの陸稲栽培がルソン島においてかつてはより広く行われていたと推定される背景として、陸稲栽培にかわって広がりつつある水田耕作の展開を指摘している。アジアの稲作においては、焼畑稲作がより原始的で、水田稲作がより発達した稲作の段階であるというような漠然とした受けとめ方が流布しているが、そういう発達段階としてではなく、環境への適応形態としてのさまざまな陸稲栽培の存在を明らかにしているのが、この古川論文のひとつの論点でもある。

古川さんはこの論文を発表して以後、さらに地理的空間を広げて東南アジア島嶼部一带にとどまらず、東南アジア大陸部から中国さらには西アジアへと調査の範囲を広げている。そして稲作論にとどまらず、農耕文化論や農耕起源論へとさらに関心が広がっているようである⁵⁾。地理的空間と歴史的空間の両方に目を配った広域比較調査という古川さんの調査手法は、先述の定着調査の手法とはまったく異なるやり方ではあるが、アジアの稲作の実態をつかむもうひとつの有効な手段を提示しているのではないかと思う。

最後の、高谷・立本・古川3氏の共著になる「スマトラの小区画水田」は、インドネシア、スマトラ島のバリサン山地の北部、タパヌリ地方のごく限られた地域で行われる稲作を紹介している。1区画がわずか2メートル四方程度という小さな区画の水田が広がる景観は、東南アジアの島嶼部だけでなく、アジ

アの稲作圏全体を見わたしても非常に特異なものである。スマトラの南部から北部にわたって広域の調査を共同で行っていた著者たちが、この特異な景観を前にして、焼畑から水田への移行過程に現れた稲作のひとつの適応形態としてこれをとらえ、それについて議論をめぐらしているのがこの論文である。

小区画という特異な水田の存在とそこで耕作の様子を紹介する論文ではあるが、実は、この調査を行っていたころ著者たちは日本国内で発掘された小さな区画をもつ古代の水田遺構にもすでに関心を寄せていた。ちょうどこの論文が発表されたころは、日本の弥生時代や古墳時代の遺跡から水田の跡が検出され、なかにはこのタバヌリの小区画水田とたいへんよく似た形状をもつ水田が発掘されていた時期であった⁶⁾。このように考古学分野で水田址の発掘が続出していたころでもあったので、この論文が発表されたときには、考古学者から大きな関心が寄せられることになった。

著者たちは日本の小区画水田について論文では何も言及していないものの、これが発表された『農耕の技術』第4号に、考古学者八賀晋さんが「古代の水田と区画」というタイトルでコメントを寄せたのは上述のような背景があったからである。古代における日本の小区画水田の開始が水田拡大における地形選択と密接にかかわっていたという八賀さんのコメントは、水田農耕の展開という場面で日本とこのタバヌリとが共通した技術選択を行っていたことを示唆している。日本の古代稲作はすでに水田稲作を受容していたので、焼畑からの移行形態にあるタバヌリの場合と事情は異なるけれども、水田の拡大という新しい環境への適応の場面で共通した技術が現れている点が興味深いところである。

このように、小区画水田というたいへん特異な稲作の存在が、東南アジアのスマトラの稲作と日本の古代の稲作とを結びつけるという興味深い展開をもたらした。たまたま小区画水田というかなり特殊な事例であったからこういう比較が行われたとも言えるが、実は、こうした比較の視点は稲作の起源や歴史を学ぶうえでたいへん重要な作業でもある。現存する稲作の民俗事例と考古学的な発掘事例との比較、あるいは広域にわたる稲作技術や農具類の比較などに

よって、稲作起源論や系譜論がさらに内容豊かに展開できると思えるからである。「スマトラの小区画水田」はそういった意味でもひとつの好例ではなかったかと思う。

フィールド・ワークから生まれた稲作論として本巻には6つの論考を収録した。すでに解説したように、すべての論文がフィールドでの見聞にもとづいてまとめられているが、そのいずれもが独立した論文としても1つの稲作論といえるだけのパースペクティブを提示していたように思う。そこに共通するのは稲作を行うのは人間であるという当たり前の事実である。稲作を調査しつつ、実は、その稲をつくるために人々がどんな環境適応を果たしてきたのか、そしてその稲作を維持させるためにどんな工夫を加えてきたのか、そういう主題をどの論文を扱っているのである。

結局のところ、稲作論というのは稲の生育や栽培についての技術論にとどまるものではなく、稲作の全体像を描こうとするきわめて総合的な科学であり思考でもあるということになる。ここに収録された6篇のほとんどが、いずれもその標題の冒頭に調査地域の地名を冠しているので、あるいは読者のなかにはその標題を見てアジア各地の稲作事例を集めたものかという印象をもつ方がいるかもしれない。しかし、そのいずれもが、この解説で述べたように、アジアの稲作論のさらに豊かな展開へと導いていくだけの内容を備えていることに注意を向けていただきたい。各著者の調査手法やその調査結果の論議は、たんにアジアの稲作だけでなく、農耕という人類共通の営みを理解するうえでも大いに役立つはずである。そんなところを本巻から汲み取っていただけるなら幸いである。

注および参考文献

- 1) アジアの稲作を紹介した農学分野の代表的な文献としては、農林省熱帯農業研究センター・国際協力事業団（共編）『熱帯アジアの稲作』（農林統計協会、1975年）、日本作物学会（編）『東南アジアの稲作』（『日本作物学会記事』特別号、1978年）、

『世界のコメと稲作』（『農業および園芸』第62巻臨時増刊号、養賢堂、1987年）などがある。

- 2) たとえば、高谷好一「アジア稲作の生態構造」〔渡部忠世（責任編集）『稲のアジア史』第1巻、pp.33-74、小学館、1987年〕や、高谷好一『コメをどう捉えるのか』（NHK ブックス、日本放送出版協会、1990年）などを参照されたい。
- 3) 稲作技術の類型を論じた、田中耕司「稲作技術の類型と分布」〔渡部忠世（責任編集）『稲のアジア史』第1巻、pp.213-276、小学館、1987年〕では中国型稲作とインド型稲作の技術伝播について言及したが、それをさらに敷衍してアジアには中国型稲作、インド型稲作、マレー型稲作の3つの稲作文化類型があることを論じた。詳しくは、田中耕司「マレー型稲作とその広がり」『東南アジア研究』29(3)：306-382、を参照されたい。
- 4) その後、宮川さんは東北タイの稲作について、「降雨の変動特性と稲作生産」（共著）『信州大学教養部紀要』自然科学第25号：181-194、あるいは「この10年間ににおける東北タイ稲作の変化」『日本作物学会東海支部会報』114：29-32、などを発表している。また、安藤さんは、バングラデシュの稲作や水田の作付体系について、「ベンガルデルタ低地部の作付体系—技術変容と作付体系展開の地域間比較」（共著）『東南アジア研究』28(3)：41-58、「バングラデシュの伝統稲作農業の特色」（共著）『もっと知りたいバングラデシュ』（弘文堂、1993年）を発表し、農村開発については「マタボールたちと在地の農村開発」（共著）『東南アジア研究』33(1)：39-65、などを発表している。
- 5) その後、古川さんは稲作を含む農耕全般について、「熱帯島嶼の稲作文化」〔渡部忠世（責任編集）『稲のアジア史』第2巻、pp.81-130、小学館、1987年〕、「マライシアの農耕系譜」『東南アジア研究』29(3)：235-305、「オアシス農耕文化の道」〔(財)NHK サービスセンター（編）『海のシルクロードを求めて』、pp.130-136、三菱広報委員会、1989年〕、「インドネシアの低湿地」（勁草書房、1992年）など、多くのフィールド・ワークの成果を発表している。
- 6) 日本の古代水田遺構については、都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』（岩波書店、1989年）の第1章に収録された「古代水田の二つの型」（pp.43-60）、工業普通『水

田の考古学』（東京大学出版会、1991年）、あるいは水田遺構の資料集として刊行された、高谷好一・工楽善通（編）『古代稲作農耕の学際的研究』（農耕文化研究振興会、1988年）が参考になる。また、高谷好一「ふたつの小区画水田」『季刊民俗学』19(1)：48-55、および同「水田が拓かれるとき」〔佐原真（編）『日本古代史⑤豊饒の大地』、pp.221-253、集英社、1986年〕は、高谷さん自身がスマトラの小区画水田と日本の小区画水田との比較を論じたものである。